

『ザイオン・イン・アン・オクトモーフ 紹介文』

岡和田晃

『エクリップス・フェイズ』の世界では、動物の知性が人間並みに引き上げられている。この設定はコードウエイナー・スミスの「人類補完機構」シリーズやデヴィッド・ブリソンの『知性化戦争』などに登場する「知性化された動物が二級市民として社会に参加する」という設定に近い、いわば一種の思考実験だ。

知性化される動物は、チンパンジーやゴリラなどの類人猿、クジラやイルカなどの鯨類、あるいはカラスやオウムなどの鳥類が一般的だが、『エクリップス・フェイズ』では、これらに加え、なんと「タコ」が知性化されている（現実でも、タコは非常に知性が高く、瓶の蓋を開けるなど多数の触腕で器用に物体を操作することで知られている）。

実際、『エクリップス・フェイズ』の体験会では、いつもタコの人気に驚かされる。言ってしまうえばタコは『エクリップス・フェイズ』のマスコットなのだ。

そして本作「ザイオン・イン・アン・オクトモーフ」は、このタコにスポットを当てた小説である。……とは言っても、出落ちには終わらない。片理誠の「黄泉の縁を巡る」

に引き続き、本作も連載という形で公開していく。もちろん大活躍するタコは、『エク
リプス・フェイズ』のルールを使ってデザインされたもの。著者の伊野隆之は実際にこ
のキャラクターを使って『エクリプス・フェイズ』のゲーム・プレイに参加している。
そう、伊野隆之は本気なのだ！

伊野隆之は『樹環惑星 ―ダイビング・オパリアー』（徳間書店）で第11回日本SF
新人賞を受賞した俊英。同作はアーシユラ・K・ルルグインの『世界の合言葉は森』と
眉村卓の「司政官」シリーズをブレンドさせたような読み応えある作品だが、なんと
っても舞台となる惑星の重厚なシミュレーションが魅力的だ。長篇に見られる精緻な設
定と、短篇「SF／サイエンフィクション」(<http://prologuwave.com/archives/833>)
や「ピア・アイ・アム」で垣間見えるユーモア感覚がブレンドされた本作は、伊野隆之
の新境地を拓く作品とみなしても過言ではないだろう。なお、金星の設定には著者が独
自に想像を膨らませた部分がある。